

雅ねえの、みんなで取り組む

# 獣害対策講座 Vol.16

※タイトルに記載している『雅ねえ』の表記は、本人の原稿どおりで掲載の了承を得ています。

この原稿書こうと思ってパソコン立ち上げたところで、外でロケット花火の音。

耳を澄ます。

お隣のノリちゃんが畑で撃つみたい。

一発で終わりなら、カラスやヒヨドリみたいな畑にきた鳥の追っ払い。

2発、3発、4発と連続で間隔をあげずに撃つ時はサル。

サルときは誰かが撃つと近所で気づいた人が一斉に加勢して撃つ約束。

で、2発目がなった瞬間、あたしも窓開けてノリちゃんちの竹藪めがけて窓際の花火鉄砲で3発ロケット花火発射！

山側の市さんも撃ち始めた。サル対策で一番大切なのはとにかく連携して追うこと。

## おさらいと予習

### 前回

前回は獣害対策より大切な健康管理。本紙4月号の保健福祉課の記事を参考に獣害対策を兼ねたフレイルの予防についてお話ししました。

だって、獣害対策ってなんか、あたし含めてほとんど高齢者だもんね。

### 今回

アツ、冒頭でサルにロケット花火撃つたこといきなり書いたのは、ちょうど今回サルのこと書くつもりだったから。

サル対策が一番大切なのは、正しい知識。

大崎でも過去に問題となり、地元猟友会がパトロール活動を実施して、現在被害は減少したと聞いたけど：

でも、今が肝心。広島県のある町では児童が遊んでる校庭にサルのムレがきて、あたし飛んで行って先生たちに講習会したこともあるから。

## サルの寿命

ねえ、ねえ、サルの寿命ってどれくらい知ってる？

人÷4＝サル

春に産まれてほしい1年が赤ちゃん、2～3歳は子ども、4歳くらいが青春時代。

ところが、じゃあ何歳から大人かっていうと、山だけで生活するサルと平気で里にて庭や畑を荒らすサルで大き

な差ができる。

## 山のサル、里のサル

サルの健康状態は餌によって大きく左右されている。

山ではメスサルが成長して出産できる体まで育つのに6～7年、でも冬でも青々としてる土手の雑草やカキやコマやダイコン食ってる里のサルは栄養状態がよくて成長が早くて4歳で赤ちゃん産じやう。

山のサルにとっては餌の極端になくなる冬を無事に超えるって大問題で出産した母ザルも十分な授乳ができず、春に産まれた赤ちゃんの30～50パーセント、多い時には半数が満1歳になれずに死んじゃう。

原因は栄養不良、餓死。

一方里に出没するサルの母ちゃんは稲刈後に再生した二番穂のコメやレンゲ、畦の青草、畑のミカンやダイコン、草むらに投棄された野菜クズと食べ放題で、すくぶる健康。赤ちゃんもほとんどがすくすくそだって親になる。

(13ページの表参照)

## 山の食文化、里の食文化

サルは群れで動く。

そしてそれぞれの群れは独自の食文化を持っている。

山の群れは里にしかないカシノやカキやビワが食べ物だと知らないこともある。

食べ物がない時に人の来ない耕作放棄園のミカンや竹藪に投棄された規格外のダイコンなんかにありついたサルは、次第に集落周辺をめぐる始め、カキとかビワとかいんななもの味を覚えていく。

そして手取り早く満腹できるおいしい餌を覚えてしまふと徐々に山で食べていた餌を忘れていく。

これが里のサルの誕生ってわけ。

じゃあどうして里めぐりして畑荒らす里のサルの群れが増えるのか？っていうのを表でみてもう一度確認。

山のサルは6～7歳でやっとな赤ちゃん産むけど、その30～50パーセントは1歳までに死んじやう。栄養状態悪いから妊娠は2～3年に1回。

つまり、山の群れって現状維持が精いっぱい。

これに対して里の群れ、4